



かみかすや わだうち

上粕屋・和田内遺跡 第4次調査 2-1 ②区・4区 (伊勢原市No. 206)

所在地 伊勢原市上粕屋 2916-1 番地他
期間 令和元 (2019) 年 9 月 1 日～
 令和 2 (2020) 年 3 月 31 日
調査面積 1,112㎡
担当者 松葉崇・長谷川厚・村松篤

調査概要

本調査は、国土交通省関東地方整備局横浜国道事務所による、一般国道 246 号 (厚木秦野道路) 建設事業に伴う、事前の埋蔵文化財発掘調査として実施しました。

令和元年度は、中断となっていた、2-1 ②区・4区の調査を再開しました。調査は、縄文時代～古墳時代 (一部、奈良・平安時代と中世を含む) を行いました。

(1) **古墳時代** これまでの第4次調査ではほとんど検出されなかった古墳時代前期の遺構が発見されました。遺構は、4区の中央から西にかけて集中して発見されました。

注目されるのは、板状加工材の出土です。F 10号住居、F 11・15・16・19号土坑から出土しました。土坑の周囲は、凹地のように低くなっており、地中の水分が多かったと推測されます。土坑は、板状加工材の保管場所として利用されていたと考えられます。さらに想像を逞しくするならば、F 8・9号住居はこれら板状加工材を製品に加工する作業場であったのかもしれない。

(2) **縄文時代** 住居を3棟発見しました。発見した住居は、全て敷石住居であったと考えら



図1 調査地の位置 (1/25000)

れます。J 15号住居は、敷石住居ですが、多くの石は抜かれていました。炉と入り口へ延びる敷石のみ良好な残存状況であるため、この部分のみ意図的に存置したと考えられます。内部に礫が散在し、これら礫より下層から帯状に焼土や炭化物が発見されました。この検出状況から、住居の火入れ等を含む火災の痕跡は、住居に石を敷く前の事象と考えられます。炉と入り口からは埋甕が出土しています。また、残存する中央の敷石の下からも炉と埋甕を検出しました。住居は、少なくとも1回以上建て替えがあったこととなります。時期は堀之内Ⅰ式の古い段階です。

まとめ

縄文海退期以降に現在の形状となった和田内の谷戸は、埋没が進み安定的な斜面となったのが縄文時代後期と考えられます。後期以降、営為が確認できるようになります。

この時期、対岸の秋山台地上と近接する神成松台地上では、大きな集落が形成されていたと考えられ、関連について検討課題となります。

今回の調査では、古墳時代前期の住居等が発見され、第2次調査の成果も含めると、この時期の痕跡は、4区より東側となる和田内谷戸の入り口付近に集中するようです。集落内で木材

を板状に加工し、保管。そして製品へと加工したのでしょうか。近隣の上粕屋・和田内下遺跡では、古墳時代の耕作跡と農耕具が発見されています。和田内に居を構え、農耕具を製作し、前面に広がる低地で耕作していた情景を推測できます。(松葉 崇)



写真1 F 10号住居(北西から)



写真4 J 14号住居(南から)



写真2 F 11号土坑(西から)



写真5 J 15号住居(南東から)



写真3 F 11号土坑出土の板状加工材



写真6 J 15号住居炉体土器(北西から)